

植民地社会のエートスとスポーツ
——オーストラリアとニュージーランドの場合——

小林 勝法

Sports and Ethos in Colonial Societies
—In Case of Australia and New Zealand—

Katsunori Kobayashi

So many sports have appeared and grown in so many societies. However there is no sport which appeared in more than two societies. Though some sports could have something in common with one another, they are not exactly the same. One sport appeared in one society and another sport did in another society.

Why did a certain sport appear in a certain society? Why did *not* the sport appear in the other societies? The key to solve this question is "ethos". Ethos is defined as "the characteristic spirit, prevalent tone of sentiment, of a people or community" (Oxford English Dictionary). A sense of value implicitly expressed in the rules and manners of a sport is closely akin to ethos in a society.

The purposes of this study were to clarify from the geographical and historical points of view, the reason why sports have been so popular in Australia and New Zealand, and to examine a relationship between sports and ethos at colonial days in Australia and New Zealand. Both of them were colonies established by the United Kingdom around 1800.

The results obtained are as follows;

- (1) The climates and natural features are suitable for enjoying various kinds of sports.
- (2) Immigrants at those days came from the United Kingdom where many sports appeared and were popular among people.
- (3) There had been no other amusements except sports.
- (4) There prevailed in the colony an idea which sports make a person a man and moreover make a society and a nation.
- (5) Most immigrants in Australia were convicts sent from the United Kingdom or gold-diggers and they had necessities to struggle with wastelands or to find gold nuggets. In short, ethos in Australia is "Mateship" which is composed of friendliness, equalitarianism, anti-authoritarianism and masculinity.
- (6) Immigrants in New Zealand were mostly free-settlers who were in middle class in the United Kingdom and had wishes to build an ideal country in South Pacific. They valued masculinity, fairness, anti-authoritarianism, and modesty.

はじめに

スポーツ及び身体運動文化は、ヒトの誕生以来、あらゆる文化・社会の中で、様々な形態のものが様々な生まれてきた。時代と文化・社会を越えて継承され発展してきたものもあれば、限られた地域での一時期の隆盛を誇っただけで歴史の舞台から姿を消してしまったものもある。例えば、平安時代、貴族文化華やかな頃に、蹴鞠は盛んに行われたが、この身体運動文化を享受することができたのは、特権的な貴族のみであって、庶民はこの文化の創造・発展には関与できなかった。庶民は、原始時代以来伝わる踊り、相撲、力競べなど、素朴で日常生活に密着した文化を形成していたのである。女性的で装飾的な貴族文化は、古代の階級社会の誕生、つまり貴族階級の誕生によって新しく創造・発展されたのであった。そして、中世の武士階級の台頭により貴族の権力が弱まるとともに貴族文化は衰退し、替わって男性的で軍事的な武士文化が創造された。

このように、スポーツ及び身体運動文化の盛衰は、その文化の創造・発展を担った人達が構成する社会集団の盛衰と軌を一にする上、取りも直さずその文化的特徴と合致する。言い換えれば、ある社会集団に共通してみられる気風、精神、文化的思潮、つまりは、エートスが、スポーツ及び身体運動文化の創造・発展を規定しているのである。よって、ある社会集団のエートスを明らかにすることにより、その社会集団で恰も偶然のようにして発祥あるいは発展してきたスポーツ及び身体運動文化の歴史的必然性を解明することが可能であるし、スポーツの文化的特徴を比較することによりそのスポーツを育んだ文化・社会の特徴を類推し、比較することができるのである⁽¹⁾。

本研究では、同じイギリスの植民地として出発したオーストラリアとニュージーランドの植民地時代のエートスとスポーツの関わりについて比較検討する。近代合理主義思想のもとにイギリスで発祥し発展した近代スポーツが、どのように伝播し変遷していったかを明らかにする上で、両国は地理的環境や建国の歴史が似ているだけにその植民地社会のエートスを比較検討する意義は大きい。

オーストラリアとニュージーランドは、共に、多くの国民が熱狂的にスポーツに親しんでいることで知られている。人口が、オーストラリアでは、およそ1500万人、ニュージーランドでは、およそ350万人という比較的小さな国にしては、ラグビー、ヨット、テニス、ゴルフ、水泳、陸上、登山などで国際的な選手を幾人も輩出している⁽²⁾。また、最近の調査では、なんらかの形で身体活動を実施している人の割合が大変高いことが示されている。その割合は、オーストラリアでは、およそ人口の70%⁽³⁾、ニュージーランドでは、およそ86%にも上がっている⁽⁴⁾。さらに、ニュージーランドでは、スポーツ関係のクラブに所属している人の割合は、47%にも達していることが報告されている⁽⁵⁾。

オーストラリアの植民地社会では、入植後比較的早い時期に様々なスポーツが行われていた(表2⁽⁶⁾参照)。記録に残っている最初の試合は、ニュー・サウス・ウェールズ軍隊で行われたクリケットである。これは、入植後15年目の1803年のことであるから、これより前に余暇としてスポーツが楽しまれていたことが推定される。また、オーストラリアン・フットボールの誕生は1858年のことであり、これは、イギリスのサッカー協会の発足に先んずること5年である。ラグビー・ユニオンも本国の結成(1872年)を待たずに、1864年に結成している。本国ではルールの制定をめぐってパブリック・スクール間の調整が難行したために、サッカー協会とラグビー・ユニオンの結成が遅れた⁽⁷⁾という事情があるが、それにしてもオーストラリアにおいてフット

表1 オーストラリア、ニュージーランド史略年表

西 暦	オーストラリア	西 暦	ニュージーランド	西 暦	世 界
	約3万5千年前から4万年前、アボリジニ渡来				
		9c	ポリネシア系民族渡来		
		13c中葉	マオリ族渡来		
1642	A.J. タスマン(オランダ)、タスマニア島とニュージーランドを発見			1620	ビルグリム・ファーザーズ、米国に移住
1768	J. クック(英国)上陸				
1788	流刑植民始まる			1776	アメリカ独立宣言
				1789	フランス革命勃発
		1814	キリスト教布教	1814	ウィーン会議
1830s	自由植民本格化	1839	植民活動始まる	1837	ビクトリア女王即位
1840	流刑植民停止(~1868)	1840	ワイタンギ条約締結、英領植民地となる		
		1841	N.S.W. から分離、独立		
1851	ゴールドラッシュ			1849	米国、ゴールドラッシュ
1855	各植民地への自治権付与始まる	1854	ニュージーランド国会開設	1853	ペリー、日本に来航
		1860	マオリ戦争(~1872)		
		1861	ゴールドラッシュ	1867	カナダ、英連邦自治領となる
1880s	白濠主義				
1899	ボア戦争勃発、義勇軍派兵	1899	ボア戦争勃発、義勇軍派兵		
1901	オーストラリア連邦発足	1907	英連邦自治領となる	1904	日露戦争
1915	アンザック軍(オーストラリア・ニュージーランド連合軍)によるトルコ、ガリポリ上陸作戦				
1951	ANZUS 条約締結(オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、3国の相互安全保障条約)			1973	英国、EC加盟

表2 オーストラリア、ニュージーランド スポーツ史年表⁶⁾

西 暦	オーストラリア	西 暦	ニュージーランド
1788	流刑植民始まる		
1803	クリケットが行われる(NSW*)		
1810	競馬が開かれる(シドニー)	1814	キリスト教布教
1820s	ゴルフが行われる		
1829	フットボールが行われる	1832	力競べの競技会が開かれる
1858	オーストラリアン・フットボールが生まれる	1839	植民活動始まる
1864	ラグビー・ユニオン結成	1860	YMCA が運動器具を米国から輸入
1870	クラブをはずすに行うボクシングが廃れる	1870	初のラグビーの試合が行われる
1880	テニスのビクトリア選手権大会が開かれる	**	
1889	サッカーが伝わる		
1892	NSW 水泳協会創立	1892	ラグビー・ユニオン結成
1907	ラグビー・リーグ結成	1905	オール・ブラックスの名が初めて使われる
1910s	サーフィンが行われる		
1956	メルボルン・オリンピック開催	1990	イギリス連邦競技会開催

*ニュー・サウス・ウェールズ州

**ニュージーランドでは、競馬は極めて盛んで、レガッタ、ボートレース、ピクニックも親しまれていた。1880年までに、行われスポーツはフットボール、ホッケー、クリケット、ラクロス、ゴルフ、テニスなど。

ボールの組織化が速やかに行われたことは特記すべきことである。組織化によって、そのスポーツの普及は著しく進展するであろうから、「本国のイギリスやアメリカと較べてスポーツが早く大衆化した」という主張⁽⁸⁾も頷ける。

本研究では、オーストラリアとニュージーランドでスポーツが早くからそして多くの人に親しまれてきた理由を、先ず地理学的、歴史学的側面から明らかにするとともに、植民地社会のエートスとの関連を検討する。

1. 気候・地形⁹⁾

1. 1 オーストラリア

国土面積は768万7000km²で、アラスカを除くアメリカ合衆国にほぼ等しく、日本の約21倍である。全大陸は、熱帯気候帯、乾燥気候帯と温帯気候帯の3つに分けられる。熱帯気候帯は北部と東北部の一部だけであり、国土の大部分は乾燥帯で大陸の中央部から西方および南方に広がっている。このため、人口や産業の分布に大きな影響を与えている。全人口の6割近くが7つの都市に集中しているが、その殆どは温帯気候帯で西岸海洋性気候か、地中海性気候、温暖湿润気候である。年間の最低気温が氷点下に達することはまれで、適度の雨量もある。スポーツをするのには理想的な気候であって、一年を通して何らかのスポーツに親しむことができる。

地形は、ほぼ水平に保たれている地域が広く、波浪状の丘陵や高地も面積は限られ高度も高くはない。標高600m以上の地域はおよそ5%を占めるに過ぎない。植民地時代には、広大な草原でうさぎ狩りやカンガルー狩りが盛んに行われた¹⁰⁾。良港と海浜に恵まれているので、海水浴、サーフィン、ダイビング、ヨットに適している。人命救助に対する関心も強く、学校教育にも取り上げられているし、ボランティアで救助活動に参加している人も多い。

1. 2 ニュージーランド

国土面積は26万9000km²で、日本の本州と九州を合わせた広さである。全体として、西岸海洋性気候帯に属し、気温の年較差はおおむね11℃以下で、寒暑の差が少なく、夏は涼しく冬は暖かい。都市部での降雪はまれで、芝は一年中緑のままであるのでオーストラリア同様、芝の上のスポーツである、クリケット、フットボール、テニス、ローンボールなどに適している。中でも、ラグビーは国民の代表的なスポーツで、ニュージーランドのナショナルチームのオールブラックスは世界最強の誉れが高い。

地形は、火山やフィヨルドなど変化に富み、標高3000mを超す峰が18峰もある南アルプスではスキーやトレッキングが、川や湖では鱒釣り、鰻取りが楽しめる。四面環海の島国であるので、海のスポーツも盛んである。

2. 植民地社会のエートス

元アメリカ大使夫人のエド・クラークは、「オーストラリアで暮らすことは、体育館の中で暮らすようなことだ。だって、いつも誰かが何か運動をしているもの」といっている¹¹⁾。また、ダンスタンは、「スポーツは、どのオーストラリア人も情熱的に信じる唯一のもの、即ち究極的な超宗教である。(中略)スポーツは、オーストラリアの男女をより強くする。そして、一番いいことは、オーストラリア人の名声を海外に広め、オーストラリアを一つの国家として結合していく助けになる」とも述べている¹²⁾。

このように、オーストラリア人が、スポーツに精を出した理由として、歴史学者のK. エルフオードは、以下の4つの理由を挙げている¹³⁾。

①スポーツに適した温暖な気候。

②移住してきた人が、世界で最もスポーツに親しんでいた国=イギリスから、渡ってきたとい

うこと。

- ③移住したばかりの頃は、スポーツの他には文化的保養的なものが少なかったことが、一層スポーツを盛んにすることになったということ。
- ④スポーツが人格を形成し、延いては社会や国家を形成することに資することになるという信念が広く行き渡っていたということ。「スポーツは国民を作り、ねばり強くすることに欠くことができない」という考え方が、オーストラリア初期の新聞の社説に、何度も現れていることを見ることが出来る。

以上の4つの理由は、他の研究者、例えばK. ダンスタン¹²やW. マンドゥル¹⁴などにも支持されている。また、ニュージーランドにおいても、スポーツが盛んな理由を同じように考えているし、上記の4つの理由をそのまま当てはめることが出来る。

このようにして、見てくるとオーストラリアとニュージーランドでは、スポーツが同じようにして始まり、同じように行われているように思われるが、オーストラリアでは、プレイが荒々しく、勝利に対する情熱がひと倍強いように思われる。たとえば、優秀な成績を持つオーストラリアのボート選手スチュアート・A・マッケンジーは、「スポーツで完全な紳士でいるなんていうイギリス人の態度は、バカで、時代遅れだ」と言い放し、さらに、「勝ちたいというものすごい衝動があらゆる努力を呼び起こしているのだ。我々の少年たちは、いつも、勝つ、勝つ、勝つ、ということを目的にして一体となってやっている」とも述べている¹⁵。また、オーストラリアの代表的なスポーツであるオーストラリアン・フットボールは、雄壮で荒々しいことで知られている。一方、ニュージーランドでは、紳士の伝統として武勇・公平・謙遜・敗北したときの雄々しさ等が重要視されている印象がある¹⁶。

これは、どうしてであろうか。この問題を説く鍵として、それぞれの植民地社会に現れた気風・精神・文化思潮、すなわちエトスに焦点を当て、歴史的考察を加えていくことにしたい。

2. 1 オーストラリア

オーストラリアは、1642年、オランダのアベル・タスマンによって発見され、ヨーロッパにその存在を知られるようになったものの、その後長い間返り見られることはなかった。1768年には、イギリスのジェームス・クックが上陸し、イギリス領であることを宣言したが、その後もしばらくの間は、見向きもされなかった。ところが、1776年にアメリカが独立を宣言したことによって、この広大な大陸の持つ可能性が俄然注目されるようになった。それは、それまで流刑地として利用してきたアメリカが流刑囚の受け入れを拒否したため現れた、アメリカの代替地としての可能性であった。産業革命と農業改革によるイギリス社会の急激な変化がもたらした犯罪者の増加は衰えることがなく、監獄や代用物の監獄船は囚人で溢れていた。これらの囚人の流刑先としてオーストラリアが選ばれたが、同時にイギリスは南太平洋に植民地を建設することによって太平洋でのフランスの動きを牽制することも目論んでいた。さらには、アジア貿易の拠点としての可能性も考えていた¹⁷。

イギリスには、1832年まで正式な警察はなかった。当時の困窮を究めた生活のなかでは、生きのびるために些細な盗みを働くものが多くいたが、捕まると簡単な裁判で刑期を言い渡された（通常は7年か14年）。オーストラリアに連れてこられた流刑囚の大部分は20才前後の若者で、食物や衣類、小額の金銭を盗んだりしただけで、家族や友人から遙か離れた地球の裏側へと流されて来たのであった。植民の初期には政治犯や重罪人が流されて来たのではない。凶悪犯がノーフォーク島、タスマニアなどの苛酷な条件の刑務植民地に送られるようになるのは、後の時代の

ことである¹⁸⁸。

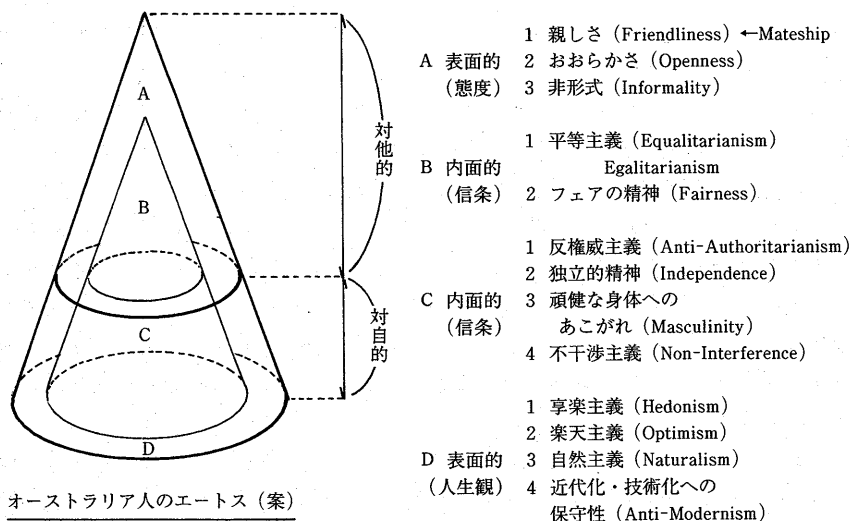
植民開始の1788年に上陸した移民の4分の3は囚人で占められていた。自由移民は殆ど認められておらず、囚人以外は政府の役人と軍人、なんらかの技術を持った職人などであった。オーストラリアには全部で16万人にのぼる囚人が移送されたが、最初の30年間は正にイギリスの監獄の役割を果たしていた。囚人の取り扱いがひどく、植民地は悪習がはびこり、退廃していた。ニューサウスウェールズの初代英国国協会司祭リチャード・ジョンソンは「職権をかさにきてのゆすり、独裁的な支配、圧政、植民地の荒廃ぶり、将校達は、1200%の暴利をむさぼる酒の販売で、植民地をひどい状態に追いやっている」と憤っている¹⁸⁹。

このような苛酷で非合理的な流刑体制下に苦しむ囚人たちが、官憲に対抗して結束し合う気風として、メイトシップ（オーストラリアの発音ではマイトシップ）が生まれた。もともとは、囚人仲間の仁義のようなものであったが、その後、土地は痩せ、乾燥した内陸部に入っていかなければならなかった開拓民たちにも広まった。さらには、共同作業が必要とされた金山坑夫たちの間にも広がり、発達していった¹⁹⁰。

殊に、ゴールドラッシュは、オーストラリアの国民性を形成する上で大変重要な役割を果たした。ゴールドラッシュと言うと、カリフォルニアのそれが有名だが、ゴールドラッシュの10年間で増えた人口は、カリフォルニアで29万人（9万人→38万人）、オーストラリアで75万人（40万人→115万人）、殊に、金鉱が発見されたビクトリア州では10万人から54万人に急増している。因に、ニュージーランドでは、ゴールドラッシュの10年間で増えた人口は、およそ20万人である¹⁹¹。このように、ゴールドラッシュに殺到した規模から言えば、オーストラリアの方が圧倒的に大きい。その上、建国の基盤が既に出来ていたアメリカに較べ、未だに自治権も付与されていなかったオーストラリアにとっては、このゴールドラッシュが大きな転換点になった。あの荒々しく、ダイナミックなプレイで有名なオーストラリアン・フットボールもこの時期に金山坑夫とアイルランド系移民の間で生まれ発展していったのである¹⁹²。

さて、越智¹⁹³が指摘しているように、アメリカの国民性を表す言葉の一つがフロンティア・スピリットだとするならば、オーストラリアのそれは、メイトシップであろう。オーストラリアの辺境の地において生きのびるための手段がこのメイトシップであったのである。既に、述べたように、この気質は、囚人、小規模農牧業者、牧童、金山坑夫などの下層社会、そして男性中心の社会で生まれ発達していったものである。布川¹⁹⁴は、現代オーストラリア（特に、イギリス系）のエートス（気風、精神）を図1のように模式化している。右側に羅列してある特質の内、メイトシップに特に関連しているのは、「親しさ」、「平等主義」、「反権威主義」、「頑健な身体へのあこがれ」である。そして、この中で注目したいのは、平等主義である。ここでの、平等とは下層社会内での平等であって、階級差のない社会を意味しているのではない。オーストラリア社会では、社会的に成功して社会の上層へと昇ることは少しも評価されないばかりか、逆に嫌悪され、軽蔑されることになるのであるという。つまり、ずっと下層に留まり仲間であることを暗黙のうちに了解しあっているという平等主義なのである。これは、権力に反して結束を固めている者たちにとっては、その結束を破って権力側につくことが最大のタブーであったことの名残りだと思われる。現代でも上位の者の方が下位の者に対して肩身が狭い思いを抱いているようであり、「オーストラリアでは、金持ちであればあるほど民主主義の名のもとに、みすばらしい身なりをする」とまで言われている¹⁹⁵。

図1 オーストラリア人のエートスの構造 (布川清司)⁽²³⁾



このように、社会的承認を得たり、高い地位に就き力を発揮したいという欲求が抑圧されたこともオーストラリア人をしてスポーツに情熱を傾けさせたのではないだろうか。未開の地の苛酷な生活環境のなかで、頑健な身体は必要とされたことだろうし、さらに、結束の強さを連想させるチーム・ワークや損得を考えずに力強い相手に突進していく姿勢は高く評価されたことであろう。

スポーツは、このような気風の中で盛んに行われたのであった。そして、オーストラリアが、一つの国として統一性を獲得していく過程で、スポーツが果たした役割は極めて重要であった。クリケットの試合で、本国イギリスを打ち負かすたびに、オーストラリア国民の国家意識は大いに高揚したものであった。アメリカのような独立戦争を経験しなかったオーストラリアにとって、クリケット・グラウンドがまさに戦場であったのかもしれない。このようにして、スポーツは、オーストラリア社会の中で、益々奨励され親しまれるようになったのである。

2. 2 ニューゼーランド

ニューゼーランドには、およそ20万人のポリネシア系のマオリ族が狩猟・農耕・漁猟生活を営んでいた。彼らは、「戦闘や血なまぐさい行為に、これほど大きな喜びを表した民族は世界でもまれであろう」⁽²⁴⁾とされているほど好戦的な民族であった。西洋人たちは、捕鯨の基地として、あるいは、あざらし漁を営むために一時的に沿岸部に滞在していたが、本格的な入植が始まるのは、タスマンの発見後およそ200年経ってからのことである。ニュー・サウス・ウェールズの延長として、僅かに流刑囚も入植していたが、1839年に自由植民としての植民活動が活発になり、人口も急増し、1858年にはマオリ人口を上回ることになる⁽²⁵⁾。

入植者の殆どが、イギリスの中産階級の出身者であった。彼らは、オーストラリアの流刑囚や金山坑夫とは違い、「由緒正しいイギリス人」であることに誇りをもち、新世界に理想郷を建設しよう并希望をもって自ら移住して来たのであった⁽²⁶⁾。また、一方、布教に従事している宗教関係者は、マオリのための国家建設を目指した⁽²⁷⁾。この時代は、西欧で啓蒙主義と福音主義が絶頂期にあったのであり、植民地政策も大きく変わっていた。このような時代背景もオーストラリア

とニュージーランドとは大きく異なっている。オーストラリアのアボリジニーが次々と殺害され、さらに、ヨーロッパ人が持ち込んだ病気のために、一時は6万人までに激減したのに対し、ニュージーランドの場合は、マオリとヨーロッパ人との10年を超える戦争を経験したものの現在では、平和共存し混血も進んでいる⁶⁹。

ニュージーランドの土地はオーストラリアよりも肥えているので、小規模農業に適し、安定した生活ができた。入植者の願っていた「イギリス社会の中流階級の生活水準」⁷⁰は、かなりの程度実現されたと考えられている。それが、今日、「南海の英国」と言われる由縁であろう。

ニュージーランドの場合も植民地時代の初期からスポーツは奨励された。知的能力よりも身体的能力の方が社会的地位を得るのに重要であると思われてさえいた⁷¹。「フェアプレイ」、「仲間と親しくすること」、「正直であること」などの美德が、教会の中よりもラグビー場の方がより堅固に守られると考えていた人たちもいた。さらに、この若い国が、母国イギリスや他の連邦植民地と対等に張り合えるのは、スポーツ、ことにラグビーだけであった。それだけに、一層熱心にスポーツに取り組んだのだと思われる。

また、ニュージーランド人は、文化的にはヨーロッパ人であると感じながらもヨーロッパ人そのものではなく、自分の国が味わいがなく芸術性に欠け低俗であると考えていたようである。シンクレアは「英国人であると主張するのは、スポーツマンシップ、フェアプレイ、謙虚、勤勉、勇気とかいった伝統的な英国人の美点をわかちあいたいからであった」と言っている⁷²。本国から遠くはなれ、南海の孤島にあって、アジアの国々に囲まれた人々の意識は常にイギリスに向いていた。それだからこそ、戦争が起こればたとえ遠い戦地であろうとイギリス兵士として戦い、尋常でない数の命を落としているのであろう。第一次世界大戦を通して、ニュージーランドからは、12万人が出征し、そのうち1万7千人が戦死し、4万1千人が負傷した⁷³。当時のニュージーランドの総人口が約110万人であったことを考えれば、その数の大きさに驚かされる。このことからニュージーランドのナショナル・アイデンティティが大変不安定であったことが容易に想像されるが、ニュージーランドの統一した国家像を形成するのに、スポーツが果たした役割は大変重要であったと考えられている⁷⁴。近年では、太平洋国家として自覚し、オーストラリアとともに南太平洋フォーラムのリーダーシップを取り、地域の産業、経済の開発を促進しているが、西洋人とマオリの二民国家としての困難な問題を依然として抱えている。このような中で、スポーツが国民意識の高揚に役割を果たすものとして期待されている⁷⁵。

おわりに

オーストラリアとニュージーランドの特徴を対照させてまとめると、表3のようになるであろう。スポーツとエートスとの関連で重要なのは、入植者の階層と植民地での生活である。オーストラリアの場合、権力を握っている官憲、それと結託して優遇されている大規模農牧業者と小農業者、牧童、金山坑夫の二分化が進んでいた。これは、流刑植民地である以上、ある程度やむを得ないことであろう。しかし、その結果、反権威主義、平等主義、頑健な身体へのあこがれ、等を中核とする気風・生活信条が生まれたのであろう。このメイトシップの強い結束が方向を見失えば、中国人労働者の締め出しに端を発した白豪主義のようなことになりかねない

ニュージーランドの場合、気候と肥沃な土地に恵まれ、小規模ながらも安定した生活が営まれた。イギリス社会での中流階級の生活水準の維持を願いつつも、不平等へ対する嫌悪感も強かった。マオリとイギリス人の二つの民族が平和共存するという困難な課題を抱えつつも、進歩的な

表3 オーストラリアとニュージーランドの比較

	オーストラリア	ニュージーランド
自然環境・気候	都市の殆どは西岸海洋性気候か、地中海性気候、温暖湿潤気候。しかし、国土の大部分は乾燥帯	西岸海洋性気候 火山やフィヨルドなど変化に富んだ地形
先住民	アボリジニー(当初、30万人) 小規模な部族を形成 狩猟を営む	マオリ(当初、20万人) 戦闘的な民族 狩猟、農耕、漁猟を営む
建国の由来	流刑地(アメリカの代替地)	N.S.W. の延長 キリスト教布教
初期の入植者	流刑囚、商人、軍人	宣教師、流刑囚、漁師
多数の植民者	流刑囚、金山抗夫、自由植民者	自由植民者
ゴールドラッシュ	バサースト、メルボルン近郊で発見される 10年間で75万人増 (カリフォルニアでは10年間で29万人増)	ダニーデン近郊で発見される 10年間で20万人増
生活	大規模農牧業と小農・牧童・金山坑夫 ・不毛な土地との格闘 ・上層階級と下層民との抗争 ・メイトシップ	小規模農牧業 ・二民族共存の理想国家建設 ・英国社会での中流階級の生活水準を維持しようとした ・階級制度の不平等への嫌悪

国家建設が精力的におこなわれた。20世紀始めには、民主主義的かつ人道的な社会立法、普通選挙制、社会保障、土地改革などによって、当時最も進歩的な国と見られるようにまでなったのである。

以上のような相違点を理解すると、両国のスポーツに対する態度の相違が理解できる。一言で言えば、オーストラリアは勝利に執着し熱狂的であるのに対し、ニュージーランドはイギリスのジェントルマンシップの伝統にのっとっているということである。

本研究ではスポーツの比較検討が十分になされなかった。今後の個々のスポーツの伝播、発展の状況を調査し、エートスとの関連を探っていくことが必要である。差し当たっては、オーストラリアン・フットボールの起源と歴史の研究が重要である。しかし、それにしても、イギリスで発祥したフットボール一つを取ってみても、ラグビーとサッカーを生みだし、オーストラリアではオーストラリアン・フットボールに、アメリカではアメリカン・フットボールに、カナダではカナディアン・フットボールに変遷していった事実を前にすると、スポーツとエートスの関連を探る研究領域が限りなく広いことが分かる。

注及び引用・参考文献

- (1) 例えば中村敏雄は、「スポーツの風土」(大修館書店, 1981)において、国民性の観点から、日本、イギリス、アメリカのスポーツを比較検討している。
- (2) 例えば、ラグビーのナショナルチームのオールブラックス(ニュージーランド)とワラビーズ(オーストラリア)は、世界で一位、二位を争う強豪チームであるし、水泳のドン・フレーザー、陸上のリサ・マーチン、テニスのロッド・レーバー、バット・キャッシュ、イボンヌ・コーリー、ゴルフのグレッグ・ノーマン、登山家のヒラリー卿などは、世界的に著名である。
- (3) Department of the Arts, Sport, the Environment, Tourism and Territories, *Physical Activity Levels of Australians*, Australian Government Publishing Service, 1988

- (4) *New Zealand Official Yearbook 1988~89*, Government Printing Office, 1988, p.417
- (5) *Ibid*, p.418
- (6) 以下の文献を参考にして作成した。
 Brasch, R., *How Did Sports Begin?*, Longman Australia Pty Ltd., 1971
 Department of Sport, Recreation and Tourism, Australian Sports Commission, *Australian Sport : A Profile*, Australian Government Publishing Service, 1985
 Chester, R.H., & N.A.C. McMillan, *The Encyclopedia of New Zealand Rugby*, MOA Publications, 1981
 Fraster, B., *The New Zealand Book of Events*, Reed Methuen Publishers LTD, 1986
 Morrell, W.P. & O.O.W. Hall, *A History of New Zealand Life*, Whitcombe & Tombs LTD., 1957
- (7) マグーン, F.P.Jr., (忍足欣四郎訳), 「フットボールの社会史」, 岩波書店, 1985 (Magoun, F.P.Jr., *History of Football from the Beginnings to 1871*, Kolner Anglistische Arbeiten 1938)
- (8) D. ホーン, (竹下美保子訳), 「オーストラリアの解剖」, サイマル出版会, 1972, p.181 (Horne, D., *The Next Australia*, Angus & Robertson, Sydney, 1970)
- (9) この章は主に以下の文献を参考にした。
 福井英一郎編, 「世界地理11, オセオニア」, 朝倉書店, 1972
 「世界の国シリーズ17 オセオニア」, 講談社, 1984
- (10) 藤川隆男, 「オーストラリア 歴史の旅」, 朝日新聞社, 1990, pp.65-118
- (11) Department of Sport, Recreation and Tourism, Australian Sports Commission, *Australian Sport : A Profile*, Australian Government Publishing Service, 1985. p.14
- (12) Dunstan, K., *Sports*, Cassell Australia LTD, 1973
- (13) エルフオード, K., “スポーツとオーストラリア人の形成”, (ジャキューズ, T.G. パビア, G.R. 編, (大橋美勝訳), 「スポーツの楽しさとは何か」, 道和書院, 1983, pp.59-60 (Jaques, T.G. & G.R. Pavia, *Sport in Australia*, McGraw-Hill Book Company Australia Pty Limited, 1976)
- (14) Mandle, W., *Winners Can Laugh. Australian Connexions Series*, Penguin, Melbourne, 1974
- (15) Dunstan, K., *Op.cit.*, p.16
- (16) Hincliff, J., *The Nature and Meaning of Sport in New Zealand*, Center for Continuing Education, 1978
- (17) Driscoll, J. & G. Reid, *Convicts to Conscripts*, MacMillan Co., 1978, pp.14-15
- (18) シェリントン, G., (加茂恵津子訳), 「オーストラリアの移民」, 勁草書房, 1985 pp.31-35 (Sherington, G., *Australia's Immigrants*, George Allen & Unwin Australia Pty. Ltd. 1980)
- (19) *Ibid*, pp.27-28
- (20) 越智道雄, 「新世界のエトス」, 評論社, 1984, p.34
- (21) 同上書, p.241. 及び地引喜博, 「現代ニューージーランド」サイマル出版会, 1984, p.65
- (22) オーストラリアン・フットボールが行われるのは, ビクトリア州, 南オーストラリア州, タスマニア州で, ニューサウスウェールズ州やクイーンズランド州では行われず, こちらではラグビーが盛んである。
- (23) 布川清司, 『オーストラリアのエトス』(豪日交流基金, 「第2回オーストラリア研究シンポジウム報告書」), 1986
- (24) トレボラング, R., (池大吉訳), 「オーストラリアでうまくやる法」大修館書店, 1988, p.78
- (25) シンクレア, K., (青木公, 百々佑利子訳), 「ニューージーランド史」, 評論社, 1982, p.24 (Sinclair, K., *A History of New Zealand*, Penguin Book Ltd., 1976)
- (26) 地引喜博, 「現代ニューージーランド」, サイマル出版会, 1984, p.50
- (27) シンクレア, K., 前掲書, p.218
- (28) 地引喜博, 前掲書, p.38
- (29) スポーツの世界での象徴的な出来事に, ラグビーのオールブラックスのウォークライが挙げられる。相手チームを威嚇する為に試合前に行われるのだが, これは, マオリの代表的な戦闘のダンスである。
- (30) シンクレア, K., 前掲書, pp.80-81
- (31) Webb, S.D., & J. Collette, *New Zealand Society*, Jhon Wiley & Sons Australia Pty Ltd, 1973, p.159
- (32) シンクレア, K., 前掲書, p.219

- (33) 地引喜博, 前掲書, p.169
- (34) *New Zealand Official Yearbook 1988~89*, Government Printing Office, 1988 p.417
- (35) The Sports Development Inquiry Committee, *Sport on The Move*, The Ministry of Recreation and Sport, New Zealand, 1985